ライフストーリー・インタビューにおける
対話的構築主義とその批判に関して

渡辺　暁雄

東北公益文科大学総合研究論集第42号 抜刷

2022年1月31日発行

研究論文

ライフストーリー・インタビューにおける対話的構築主義とその批判に関して

渡辺　暁雄

「思えば、わたしの聞き書きは、ほとんどが一人旅でおこなわれました。ふらっと、なんの紹介もツテもなく見知らぬムラに飛びこんでゆくスタイルでした。苦しいけれど、至福の時間でした。なにを聞きにきたのか、と何度も問われました。仕方なく、あなたの人生を聞かせてほしくて、とか苦し紛れに答えると、俺の人生か、学者先生には見えないな、と困ったような顔で笑われました。そうして、わたしは東北のじいちゃん、ばあちゃんにあやされて育ったのですね」（赤坂憲雄 藤原辰史2021『言葉をもみほぐす』岩波書店 pp.31-32）

「「そのままでいいんです」っていうことじゃないですか。生活史をただ聞くだけって。別に肯定も否定もしない。その人の存在を「在るね」って確認する作業。やさしい作業だなというふうに思いました」（NHK ETV特集2021.9.18「私の欠片（かけら）と、東京の断片」）

１．はじめに

普段私たちは、個人的な「生活」というものを意識して考えることはない。１日というタイム・スパンのなかで、目を覚まし、食事を取り、家事を行い、仕事や学校に行き、余暇を楽しみ、休息をして、睡眠をとる。このような一連の行為を、日々何気なく行なっている。しかしその１日24時間の生活パターンは、各地域の文化的な違いによって、あるいは所属する集団や階層、職業や地位、居住地域等によって、その内容は大きく変わってくる。さらに同じ地域に住んでいても、向こう三軒両隣の生活パターンはそれぞれ異なる。特定の病院や療養所、刑務所、軍隊、寄宿制の学校など、E.ゴッフマンの言う「全制的

施設」[1]（Goffman 1961=1984 v）を除けば、本人にとっては「普段」の生活の内容も、本人以外の人々はそれぞれ別物であり、異質なパターンや内容を伴っている。

確かに各人個々の生活パターンは、それぞれの生きる集団や文化、経済・社会体制などから複雑に影響を受けているが、反対に、個人個人が、何らかのかたちで――主体的にしろ客体的にしろ、積極的にしろ消極的にしろ――所属集団や文化、経済・社会体制に影響を与え、その相互作用の結果として社会が、あるいは時の流れが形作られている。

社会学における質的調査といっても、研究対象により、ある程度方法や道具立てが異なるが、質的調査の中の一手法である「ライフヒストリー（生活史）」は、以上のような個々の人々における生活の歴史（遍歴）を、対象者へのインタビューや各種文献資料によってトータルに調べる手法である。

3.11東日本大震災、あるいは新型コロナウィルス経験等の「災厄」や、様々な障害、差別、DV、不登校、ホームレス、セクシャル・マイノリティ等、個別の「問題」を抱えた人々が、そうした経験を個人的にどのようにとらえているか、そうした生活の中で発生した（あるいはその経過中にある）大きな出来事の意味を、その個人を通して調査することも、ライフヒストリーの手法に期待されている役割である。こうした、アンケート調査等の「量的調査」では把握することが困難な、個々の人々の主体的に生きた、あるいは生かされた歴史を、その人の生きている生活の中で、その人の話しに耳を傾け、そこから得た生の資料を検証するのが、ライフヒストリーの目的と言ってもよい。

1970年代のライフヒストリー・リバイバル[2]以降、日本の社会学ではこの手法が独自的進化を遂げてきた。中でも2002年に出版された桜井厚の『インタビューの社会学――ライフストーリーの聞き方』[3]、中んずく同書における「ライフストーリー（ライフヒストリーとは異なる。後述）」という形式や、その

---

[1]「全制的施設 a total institution」とは、多数の類似の境遇にある個々人が、一緒に、相当期間にわたって包括社会から遮断されて、閉鎖的で形式的に管理された日常生活を送る居住と仕事の場所のこと。

[2] 1977年、中野卓『口述の生活史―或る女の愛と呪いの日本近代―』が登場して以降、それまで量的調査が中心であった社会学の調査手法に、質的調査も積極的に加えられるようになった。「リバイバル」とは1920年代のシカゴ学派による質的調査の隆盛を前提としているため。

[3] 以下、本書からの引用はページ数（p.）のみを示す。

中での「対話的構築主義」と呼ばれる方法論は、それまでの実証主義的な調査手法に対し、認識論的転換を迫るものであった。その後、多くの賛同者と、この手法を用いた書籍や報告論文が数多世に出た。と同時に多くの批判を受けることとなったが、この手法がその後の社会学、社会調査の技法や調査の在り方自体に大きな影響を与えたことには変わりはない。

本稿では、桜井の「ライフストーリー」や「対話的構築主義」を振り返り、それに対する批判、特に岸政彦によるそれを通して、現時点でのライフヒストリー、生活史の状況を概観する。

２．桜井厚のライフストーリーにおける対話的構築主義

２．１．実証主義に対する批判的姿勢

対話的構築主義を活用するに至った桜井にとっての最大の理由は、実証主義やそれに基づいたアプローチへの強い懐疑である。

社会調査、特に量的な実証主義調査では「標準化された質問紙インタビューでは、語りのコンテクストはほとんど無視され、統計的に大量処理されるために、一人ひとりの語りの意味はたいへんあいまいになる」（p.30）これはライフヒストリーを含む質的な実証主義的インタビューでも同様であるということだ。特に実証主義的インタビューにおいては、語り手の「主体的イメージは「回答の容器vessel-of-answers」と見なされてきた（中略）語り手主体はつねに認識論的に受動的で、知識の生産にはなんのかかわりもない」（p.78）とされてきた。こうした実証主義アプローチにおける、対象（者）が本来有する「主体性」の軽視（あるいは無視）や、研究課題や手法・内容が「研究者コミュニティ内で議論され、そこで理解されれば、調査対象とされる生活者にはわからなくてもこと足りる、すなわち、客観的に判断できるのは研究者であるという、研究者側の優位が自明視」（p.23）されている状況に彼は拒否反応を示している。あるいは特定の仮説や解釈を押しつけられて対象者をカテゴリー化し「成形」する、こうした実証主義的（あるいはより広い意味での）研究者の独善性は、長い年月、個別の語り手と関わってきた桜井にとっては許容しがたいものだったと推察される。

こうした実証主義が有する課題、実証主義アプローチを否定する形で登場し

たのが、彼のいう「対話的構築主義」に基づいたライフストーリーの手法である。

２．２．対話的構築主義

ライフストーリー・インタビューは、語り手の発話が優先される「比較的自由な会話」が前提となる。それは語り手の提示する発話の中身、概念、語りの文脈（コンテクスト）を尊重する必要、つまり語り手の「主観的意味」を重視するためである。一般的なインタビュー調査では、語り手が語る内容（＝「何を語ったのか」）を重視するが、ライフストーリでは、語りの様式（＝「いかに語ったのか」）に、大きく注意をはらう。なぜならば「ライフストーリの語りが、かならずしも語り手があらかじめ保持していたものとしてインタビューの場に持ち出されたのもではなく、語り手とインタビュアーとの相互行為を通して構築されるもの」（p.28）だからだ。

このように桜井は相互の語りが構築される場、「ライフストーリーの生成に直接かかわるインタビューの場」（p.29）に着目する。「語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体にほかならない」。であるから、「語ることは、過去の出来事や経験が何であるかを述べること以上に＜いま-ここ＞を語り手とインタビュアー、双方の「主体」が生きる」という視点、これが対話的構築主義の基本的認識である。こうした「場」（＝＜いま-ここ＞）の中での相互行為により「語り手とインタビュアーの解釈がふくまれて、ひとつのまとまりをもった語りが構成される。そのテクストは、語り手の経験となんらかの関係はもってはいるが、語り手が実際に歩んできた人生とは相対的に独立した筋書きを持ったストーリーなのである。しかもそれが語り手の経験に意味をあたえ、さまざまな経験を秩序立て構造化している」（以上p.34）。語り手と聞き手の共同作業によって構成されるもの、これが「ライフストーリーの物語構成」であるということだ。

こうしたライフストーリーの物語が構成される場では、それまで実証主義アプローチなどでは非対称的（＝聞き手による「統制」）であった、インタビュアーと語り手の関係性が、同じ語る者として対等な位置関係になり、インタ

ビュー時の非対称性は解消される。「方法論的にライフストーリーをライフヒストリーから分かつ点は、後者が対象者の現実のみを描いて調査者を見えない「神の目」の位置におくのに対して、調査者の存在を語り手と同じ位置におくということである」(p. 61)。またこの非対称性は語り手が被るのみではない。例えば差別-被差別に関わる調査などの場合、インタビュアーが対象者を過剰に「聖化」してしまうこと、そして対象者の発言を無批判に受け入れ、聞き手が逆に「統制」されてしまうことがある。この場合もインタビューの詳細な記述(トランスクリプト[4])を通して、反省的に了解できるようになる。

こうしてみると、「対話的構築主義」は、シュッツらの現象学的社会学、ゴッフマンの相互行為研究、ガーフィンケルのエスノメソドロジーなど、1960年代後半から70年代にかけて登場したラディカル社会学や、フーコーの生権力論に強く影響されているのがわかる。

2．3．信頼性・客観性

またこうした語り手と聞き手の相互行為およびその結果のトランスクリプトによって、取得したデータに信頼性や客観性をもたらすことができる、と桜井は述べる。これまでのライフヒストリーを用いた質的調査で問題として挙げられてきた一つが、データの信頼性であった。信頼性とは調査を繰り返しても、あるいは誰が行っても結果に変わりがないことであり、桜井にとっても個人研究におけるデータの信頼性の確保は長年にわたる懸案事項であった。

これまでの質的研究では研究者個人の資質が結果を左右する(と考えられていた)ため、しばしば「職人芸」と揶揄されていた。しかし聞き手・語り手双方のインタビューのデータ処理の手続きを提示することにより、データの信頼性を得ることができるという。「データがどのように生成されてくるのかというプロセス(筆者註:話し手と聞き手の対話過程)を見せれば、それなりに信頼性がたかまるだろう」(桜井 西倉 2017 p.65)。それは同時にデータの客観性、信ぴょう性を高めるとともに、話し手-聞き手の相互行為場面のトランスクリプトにより調査のプロセスが明示化され、研究・調査倫理への配慮となりうる、

[4] 収録された音声データや映像データから、発話内容だけではなく音の大きさや速さ、呼気・吸気等まで忠実に書き起こす手法。社会学では主にエスノメソドロジーの会話分析で用いられる。

と述べている。

２．４．＜物語世界＞と＜ストーリー領域＞

桜井は、対話的構築主義により進行する語り手と聞き手の対話を＜ストーリー領域＞と＜物語世界＞の二次元的にわけて考えている。＜ストーリー領域＞とはインタビュアーと語り手の一般的な相互行為、質問／応答の次元、「いま－ここ」の次元であり、＜物語世界＞とは語り手の過去の経験の語り、あるいは人生の物語、「あのとき－あそこ」での物語を語っている次元である。

通常の、特定の情報を入手することを目的とする仮説検証型の実証主義アプローチでは＜ストーリー領域＞の次元のみ必要であるが、対話的構築主義の場合、無駄話や「脱線」ともとれる＜物語世界＞の方に存在意義がある。両者とも同じ、対話の流れの中にあるのには相違ないが、話者の自律性（語りをコントロールできる優位性）の高さ、話の主導権で見ると、＜ストーリー領域＞、「いま－ここ」の次元ではインタビュアーが主導権を握るのに対し、＜物語世界＞、「あのとき－あそこ」の次元では語り手に話の主導権が渡り、自律性が高くなる。自由度の高い＜物語世界＞での語りは、日常生活におけるリアリティの多元性（シュッツ）が語られる次元である。「私たちの生活世界は日常生活を至高のリアリティにおきながらも、意識作用や志向対象の違いから他とは区別される独自の領域が想定されうる。科学的思考の世界、子どもの遊びの世界、宗教的経験の世界、狂気や妄想の世界、芸術の世界、夢の世界などはそれぞれ固有の存在様式を持ち、それらは私たちの注意作用によって心にとどまっているあいだは、それぞれのリアリティを持つ」（pp.134-135）。そうした個人の内面に存在する多元的なリアリティ、社会生活の中では表出しにくい「意味領域」は、＜物語世界＞においては表出の度合いが高まるということだろう。これが調査結果の分析や解釈へと至るヒントとなり、場合によってはまた、インタビュアーのちょっとした発言により、語り手が多元的な＜物語世界＞から＜ストーリー領域＞、「いま－ここ」へ引き戻されてしまい、無味乾燥な対話が続くという場合もある。つまりそれは、インタビュアーが語り手の物語を阻害してしまった結果として現れる。この場合も調査時のインタビュアーにとっての反省（リフレクション）の材料ともなる。

２．５．モデルストーリー、マスターナラティブ、ドミナントストーリー

桜井は会話内容の分析ツールとして他にも、「モデルストーリー」――語り手が所属する特定のコミュニティ、集団内で特権的に地位を占める語り、「マスターナラティブ、ドミナントストーリー」――コミュニティを超えて広く全体社会に流通している主流的・支配的言説、といった分類用語を用いる。このモデルストーリー、マスターナラティブそれぞれで「語られている」言説と、語り手個人の立ち位置の違いや差異を観察することで、語り手のリアリティが見えてくるということだ。例えば部落差別のマスターナラティブ（社会的な偏見）に対する、被差別部落のモデルストーリー（貧困・劣悪・悲惨の語り）、部落解放運動のモデルストーリー（誇り、たくましさ、アイデンティティの語り）に対して、当の被差別者（語り手）はどのように対応したのかということは、語り手の生活史を観る手段であり、その人がマスターナラティブやモデルストーリーに対して、どのように語るのか（あるいは語らないのか）、語りの過程から探る出すことが可能であるということだ（pp.252-263；桜井 西倉 2017 p.75）。桜井が「物語は意味の構造であるだけではなく権力と政治の構造でもあって、イデオロギー的に中立ではありえない」（p.253）と述べているように、コミュニティや全体社会に対する個人的な立場の政治的配置も、語りの中から抽出することができる。

直接的に実施したインタビューではないが、筆者も山形県鶴岡市加茂地区でこの手法を使い、語り手に聞き書き生活史の発行を拒否された体験をモデルストーリーとの関連で考察したことがある（渡辺 小関 遠山 2018 p.31）。

以上、これまで述べた桜井厚の提唱する対話的構築主義と、その方法にのっとったライフストーリーの特徴をまとめると、次のようになるだろう。

・実証主義アプローチの批判とその超越
・語り手と聞き手の相互作用（共同作業）
・非対称性（インタビュアーと対象者）の克服
・語り手への配慮
・語り手による自由な語りの促進

・語り手の語り、特に＜物語世界＞（あのとき、あそこで）の重視
・インタビュー過程の詳細な記述（トランスクリプト）
・インタビュー過程の明示――信頼性・客観性の向上
・一定の方法論（ex.モデルストーリー、マスターナラティブ）
・現象学やエスノメソドロジー等の影響

３．岸政彦による対話的構築主義批判

岸政彦による生活史（彼はライフヒストリーを自覚的にこう呼称している）研究論文では、その初期から「対話的構築主義」への批判的姿勢が見られたが、最も直接的、あるいはインパクトをもって桜井の提唱したこの手法に対する批判を行ったのは、青土社『現代思想』2015年7月号（vol.43-11）に掲載された「鉤括弧を外すこと ポスト構築主義社会学の方法論のために」[5]においてであった[6]。

冒頭で岸は、この論文の主な目的が、桜井厚の「対話的構築主義」批判であることを明言している。桜井の方法は「他者理解の難しさ」への対抗として出発したはずが、自ら背景としている「ポストモダン的な理論」（現象学や社会的構築主義、エスノメソドロジーなど）によって「結局は理解という実践そのものを相対化してしまい、他者と世界に対する多様な記述可能性を自ら閉じてしまった」（p.65）としている。

３．１．非合理性をどう「理解」するか

岸は先ず、M.ヴェーバーの「行為の合理性とその理解」、他者の合理性を理解することの重要性――これは岸の根本を形成する理念として重要だと思うが――を示している。しかしながら、他者の合理性を理解することは容易ではない。また人々の普段の行為や動機からして「非合理」に満ちている。例えば明らかに不利益であることを進んで行う、ということ。外から（他者から）見た

---

[5] 同論考は後に改題・修正され「鉤括弧を外すこと―ポスト構築主義社会学の方法」として、『マンゴーと手榴弾―生活史の理論―』（勁草書房2018）に再掲されている。本稿では勁草書房版を用いて参照・引用を行う。以下、本書からの引用は（p.）のみを示す。

[6] 岸による対話的構築主義批判は彼が最初に上梓した『同化と他者化―戦後沖縄の本土就職者たち』（ナカニシヤ出版2013）において既に多くのページを割いて論究されており、内容的にも今回取り上げた論考の原型をなしている。

場合明らかに非合理な行為がある。しかしそれは日常生活の中にしばしば見受けられることだ。こうした非合理をどのように解釈するのか。例えば、社会学者が被差別地域に調査に入りインタビューを行った際、当事者から「私は差別された経験はありません」と応答された場合、その言葉をどう受け止めるか。社会学者は前提として「差別-被差別」という「社会問題」があることを前提として（少なくとも）調査地に入るが、この言葉は彼らの認識を転倒させかねないものだ。こうした事態に対し岸は、これまで社会学者が取ってきた方法として三つの選択肢（3人の社会学者の選択肢）を挙げている。

第一の選択肢として八木晃介[7]の対応がある。八木が被差別部落の調査を行った際、年配の女性から「私は生まれてから今まで、まったく一度もこのムラから外にでたことがないので、差別された経験は全然ありません」という話を聞く。八木はその言葉から、狭い被差別部落から一歩も出ない、つまり極端に限定された「社会的交通圏」に彼女は隔離されている、これ自体が差別そのものではないかと考える（つまり差別は「ある」）。そして彼女は「隔離による社会的遮断をも差別としてとらえるという感性力や認識力を、まさに差別によって剥奪されてしまった存在」（p.72）として捉えられる。通常の感性や認識力があれば差別されていることがわかるはずなのに、それがわからない。つまり八木は構造的な差別が先ず存在して、それにより通常の感性や認識力を奪われてしまった「徹底的な無能力者」（p.74）としてその女性を認識する。八木は「語り手の語りを否定し、社会問題の問題性を理論のなかに維持する道を選んだ」わけである（p.71）。

第二の選択肢は、八木の例と逆に「差別されたことはない」という語りをそのまま事実として受けとる、つまり本当に差別はなかったと解釈するものである。社会学者の谷富夫は、沖縄から本土に出稼ぎに出て、後になってUターンした人々の生活史を聞き取った。そこで谷は、「なぜ彼らは沖縄にUターンしたのか」の理由として、「本土で差別があったから」と「故郷の共同体に自発的に帰還した」の二つの仮説をたてていた。調査の結果、「差別されたから帰った」と答えた者はほとんどおらず、故郷沖縄に対する積極的な意味付けや

[7] 八木晃介『部落差別論――生き方の変革を求めて』（批評社1992）

家族や地域社会への愛着を語る者が多かったため、「「差別仮説」は棄却され「共同体仮説」が（中略）有力な候補として「索出」された」(p.77)。谷は「「差別されたから帰ったのではなく、故郷の共同体に帰りたくなったから、帰ったのだ」という語りを、そのまま理由として「鉤括弧を外して」採用（註：傍点引用者）」（p.77）した。

語り手に対して誠実なのはどちらかと問われれば、迷わず谷富夫の方だろうと岸は即断する。八木とは反対に、谷の語り手を現実が正しく認識可能な者とする姿勢には、語り手への信頼感を伺うことができる。

しかし岸のいう「鉤括弧を外す」という行為は勇気がいる。「鉤括弧」を外すことは、データから自分の主張へと変換し確定する行為だからである。さらに近年こうした研究者の鉤括弧外しは、データを恣意的に操作しているとして、ポストモダン系の理論により批判されるようになった。「調査者が恣意的な解釈を与えることに対する権力性や暴力が、徹底的に批判されてきた。そして、データの解釈についてそのような批判をおこない、日本の生活史研究において「対話的構築主義」という新しい方法をつくりあげたのが、桜井厚である」（p.79）と岸は述べる。

３．２．対話的構築主義への批判

岸は、人間の非合理性に対する社会学の第三の例として桜井厚の「対話的構築主義」の手法を提示する。

桜井は第一の八木の対応に対し、部落住民のライフストーリーが常に差別-被差別となる「研究者の解釈枠組み」を問題視し、こうした調査は調査研究者の解釈（＝カテゴリー）を裏付けるカテゴリー化のためのものでしかないとする。こうしたの研究者の想像力の欠如、つまり彼らは語り手の生活主体としての豊かな個性、創造性にまで理解が及ばないのだろうと、痛烈に批判する。こうしたカテゴリー化、その多様性や個別性を無視しての「部落」や「在日」等のラベリング。桜井にとって、解釈すること、一般化すること、理解することそのものが暴力である。同様に調査研究者は調査対象を一般化する限り「無意識の暴力」に加担しているとみる。

この「暴力」を回避するために桜井が作り出したのが「対話的構築主義」。

それは語り手が「何を語ったか」ではなく「いかに語ったか」を記述し、インタビューの場での相互行為の結果としての「構築」の場をつぶさに見ることが重要であるとする。桜井が依拠する社会構築主義の立場であれば、要は差別等の社会問題も含めた歴史は、常に、日々刻刻「構築」されてきて、現在も構築されているものであるから、「差別」というものを実体化することはできない。重要なのは構築されている現在と場所を詳細に観察・記述することであるということになる。この方法をとると「差別」という「事実」を抽出する事はすなわち「カテゴリー化」されたものとして否定され（方法論的責任を問われない）、また語る主体はその人のストーリーの中では常に「正しい」（外部的に成否の判断はできない）から、八木のような、対象者の「無能力化」からも逃れられる。先ほどの「差別されたことがない」という語りも、桜井は差別が「ある」とも「ない」とも結論付けていない（そもそも付けられない）。かわりに桜井は被差別部落の多様で個性的な生のあり方の収集を、その答えとしている。「彼は、語りの合理性を保持することで差別がなかったとも言わないし、差別の存在を保持するために語りを括弧に入れたまま、いろいろなことが語られている、ということを示すことで、その問いをずらしているのだ。彼が答えようとしているのは、それが何であるか、という問いではなく、それがいかに語られたか、という問いである（註：傍点引用者）」（p.89）。

３．３．書くことの禁止

さてこうした「対話的構築主義」に準拠し、インタビューの場で生起する語り手と聞き手の相互作用のみを抽出することしか許されないということは、いかなる結果を生み出すのか。岸は「社会調査を通じて「実態を調査してそれを書く」ということが不可能になるということである」（pp.89-90）とみる。どういうことか、少々長くなるが岸の考えを引用する。

「例えば「差別されたことがない」という語りから、差別があるとか差別がないという、実態に関する叙述はできないのである。すでに引用した通り、対話的構築主義は、語り手が「何を語ったか」ではなくそれを「いかに語ったのか」を重視するのだと述べるとき、桜井は私たちに対して、語り手の語

りの意味内容ではなくその用法を問うことで、語りの鉤括弧を外すことを禁止している。桜井厚は、語りの鉤括弧を一方的に外ことを暴力として定義したため、語りを鉤括弧の外にだすことができなくなってしまった」(p.90)。

語り手の意味内容を「解釈」した時点で、それは対象をカテゴリー化するため「暴力」となる。それは否定したい。そうすると調査研究者に可能なことは、語り手と聞き手、両者の相互作用をテーマとした研究である。会話分析を主眼としたエスノメソドロジー、もしくは様々な身体的、精神的、社会的「問題」の当事者(被害者)の過去を再構築するためのナラティブ・セラピーとして、心理系や福祉系のある種のテーマ(治療や保護、相談援助)の役割は持つかもしれない。しかし戦争や災害、構造的な差別といった社会問題を、個人の生活史から探り、それを歴史という時間と空間に対応させて、個人から社会の構造的な問題に至らんとするライフヒストリー研究は否定される。つまり、書けなくなる、のである。

「語りの尊厳を守ることと、差別の存在を否定しないということを同時に達成しようとした桜井厚は、そのかわり「事実性」へと至る回路をすべて閉ざしてしまった。もちろん事実なるものは、社会的に構築されるものである(社会的に構築されるもの以外に、他に何があるだろう)。彼が閉ざしたのは、まさにこの事実を構築する手段だったのだ。私たち自身の事実を。つまり、私たちが書くための回路を、閉ざしてしまったのである」(p.109)。

3．4.「息苦しさ」

桜井厚らによる、近年のライフストーリー、対話的構築主義に関する成果として『ライフストーリー研究に何ができるか—対話的構築主義の批判的継承』(新曜社2015)がある。第一章では桜井の調査時における違和感——苛立・困惑といった記述と、こうした調査のままならなさも重要(ポリフォニー的作品化)になるとしている。以降の章は、ライフストーリーの実践を通しての考察で、そこでは、顔に病気による障害を持つ人、ハンセン病療養所に暮らす人、在日南米人、中国残留孤児、被爆体験者、アルビノ当事者、長欠児、ひきこも

り等、社会的マイノリティと位置付けられている人々が語り手となっている。

それらの論考を読み進めていくと、過去にライフストーリー系の論考を読んだ時と同様の、一種の「つらさ」を感じる。その「つらさ」はもちろん、マイノリティの語る言葉が、一先ずマジョリティの側にいる筆者の理解不足を衝くものだったことも理由の一つではあるが、それより上記の論者に共通する「反省的思考」、ある種強調されているともとれる、リフレクションとしての記述を読むことの「つらさ」であった。この「つらさ」と同様の経験を語る中村英代は、それに「息苦しさ」という語を用いていた。「評者は、逡巡、苛立、語り手の語りを十分に理解できなかった未熟さなど調査者側の反省的思考、調査者側のさまざまな意識をなぜこれほど読まなければならいのかという息苦しさを感じた」（中村2016 p.256）とし、「堅苦しく構えずに『インタビューの社会学』や本書の桜井氏の論考は、経験に裏付けされたさまざまな助言、調査対象を尊重するための倫理、調査の豊かさと厳しさの伝授といった広い文脈で受け止め、質的調査を行う者が自らの調査の実践に生かしていく方が、桜井氏のそもそもの意図に添えるのではないだろうか」（中村2016 p.257）と結論づけている。

こうした中村の閉塞感（息苦しさ）はもともと、語り手に対するインタビュアーの「誠意」から出た結果ではある。しかし対象者への配慮はどこまですればよいのだろうか。配慮には有限性は無いように思える。はたして何のために、誰のために調査を行っているのか。

同時に対話的構築主義が内包する方法論的厳密さによるある種の「面倒くささ」、規制があまりに多い（と感じられる）ため、インタビューを開始する以前に、調査を企画すること自体が重荷になってしまう。

対話的構築主義というより、桜井のライフストーリーで取り入れている方法や姿勢、例えば＜物語世界＞と＜ストーリー領域＞という分類や、「モデルストーリー、マスターナラティブ、ドミナントストーリー」という、動態的な共同体と個人との分析枠組み、これらは厳密にいえば対象の「カテゴリー化」に結びつくのではないかとの疑問を呈されるが、現実のインタビュー過程や、その後の分析などで有効に活用することは可能であり、実際筆者も使っている。

桜井は、あまりに実証主義的アプローチを嫌悪したために、そして長年関わってきた自身のフィールドに寄せる「親愛の情」のために、かえって厳格な理論を打ち立ててしまい、多くの誤解と、それによる批判を被ることになったと、大枠では同情し、彼のアプローチのあり方も理解することができる。ただ、あえて批判するとするなら、桜井の『インタビューの社会学』を購読する対象者が、これから研究職を目指す人々であったということかもしれない。こうした状況であるにもかかわらず、桜井は自身の「ライフスト―リー」作品は、特に対話的構築主義に則ることのない「普通のオーラルヒストリーの著作」である。「私はこれは、かなり深刻な矛盾だと思う」（p.90）と岸がのべているように、多くの若い購読者（そして真面目な実践者）を想像すると、筆者もそう思わざるを得ない。

４．おわりに

人と関わり、その人の生きた人生に触れる、知らないことを教えてもらう、こちらも自身の知識を提供する。そのような時、何か自分の「範囲」が広がったような気がする。そもそも対話を本質的に厭うという人は、ほとんどいないと思うし、少なくともそう確信する。

これまで何度も個人に対する生活史調査を行ってきた。そしてインタビューの開始時にはいつも不安であった。もちろん目的があっての調査であるから、その目的となる情報を得ることが重要なのだが、それ以上に調査対象者と「うまく話ができるか」という対話の成立-不成立に関することが最大の不安であった。しかし、始めは「私なんか話す事なんてぜんぜんありませんよ」と言っていた語り手から、インタビューの最後には「話せて楽しかった」、「自分でもいろいろな発見があった」という感想をもらい、「有難うございました」と、こちらが言うと、「こちらこそ、有難う」と言ってもらえる。この時点で、インタビュー開始時の不安はなんだったのだろうと思うし、何度もそうしたことを繰り返した。

いつのころからか、調査の場を取り巻くミクロ社会学が展開する論題、日常生活の差別や排除を扱ったエスノメソドロジー、フーコーの生権力等から、現状に対して、日常生活に対して敏感になったと感じるとともに、「調査する自

分」を他者の視点から見た時の煩わしさを感じるようになってきた。そんな折に読んだ『現代思想』の岸政彦論文は、衝撃的とまでは言わないが、筆者の気持ちを多少なりとも楽にさせた。

2021年9月、岸政彦編『東京の生活史』の出版は、全国的な話題となった。150人の調査初心者が150人の他者から聞いた生活史、語弊があるが素人がこれだけ「面白い」生活史を書くというのは個人的に驚きであるとともに、自身の反省（リフレクション）になった。巻頭に挙げた２つの言のうち下のものは、NHKで放映された、「東京の生活史」のドキュメンタリーから。実際に他者へのインタビューを体験した人が、そう語っていた。

「やさしい作業だな」の「やさしい」に当てはまる「優しい」と「易しい」、両方とも筆者を鼓舞してくれた言葉だった。

【参考文献】

・赤坂憲雄 藤原辰史 2021『言葉をもみほぐす』岩波書店

・Goffman, Erving,1961,*Asylums: Essays on the Social Situation of mental Patients and Other Inmates.*Doubleday & Company（=1984 石黒毅訳『アサイラム』誠信書房）

・岸政彦 2013『同化と他者化―戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版 2013

・――――2015『断片的なものの社会学』朝日出版社

・――――2018『マンゴーと手榴弾―生活史の理論』勁草書房

・岸政彦（編）2021『東京の生活史』筑摩書房

・中村英代2016「ライフストーリー研究はどのような展開をみせていのか―書評『ライフストーリー研究に何ができるか』」『日本オーラル・ヒストリー研究』12 255-258

・桜井厚 2002『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方』せりか書房

・――――石川良子（編）2015『ライフストーリーに何ができるか―対話的構築主義の批判的継承』新曜社

・――――――西倉実季（聞き手）2017「対話的構築主義との対話―ライフストーリー研究の展望」『現代思想』45-6 60-84